

日本体育大学

令和8年度入学者選抜 【出題の意図・模範解答】

学部・選抜方式	全学部 学校推薦型選抜 スポーツ推薦（予備日）
科目	小論文

【出題の意図】

- ・論旨が明確であり、誤字脱字がなく、文字数が適正範囲内であり、文脈から要旨をつかんでいるか。
- ・ジュニア期の育成について自身の体験からの視点を結び付けて論じられているか。

【模範解答】

低年齢からの早期選抜は、発育の早い子どもが有利になりやすく、相対的に体格や筋力の発達が遅い子どもが自信を失い、競技から離脱する要因となり得る。こうした早期離脱を防ぐためには、成長段階を踏まえた育成環境の整備が不可欠である。

第一に、生物学的年齢を考慮した評価と指導を行うことである。暦年齢だけではなく、骨年齢や成熟度を踏まえてグループ分けや出場機会を調整すれば、一時的な体格差による不利を緩和できる。発達の個人差を前提に「今の結果」ではなく「将来の伸びしろ」を評価する視点が重要である。

第二に、多様な運動経験を保障することである。特定競技への過度な専門化を避け、複数種目や基礎的運動能力を高める活動を取り入れることで、身体的可能性を広げ、競技への内発的動機づけを維持できる。遅咲きの子どもにとっても、自らの得意分野を見出す契機となる。

第三に心理的支援の充実である。指導者や保護者が短期的な勝敗に偏らずに、努力や成長過程を承認することを徹底することで、自己効力感を育むことができる。失敗を学習機会と捉える風土づくりも不可欠である。

さらに、選抜制度そのものを柔軟にし、再挑戦や再選抜の機会を保障することも重要だ。一度外れたら終わりという構造ではなく、成長に応じて道が開ける仕組みが継続意欲を支える。遅咲きの子どもが競技を続けられる環境とは、成長の多様性を尊重し、長期的な視点から可能性を育む場である。勝利至上主義を乗り越え、子どもの将来に責任をもつ育成体制が求められる。